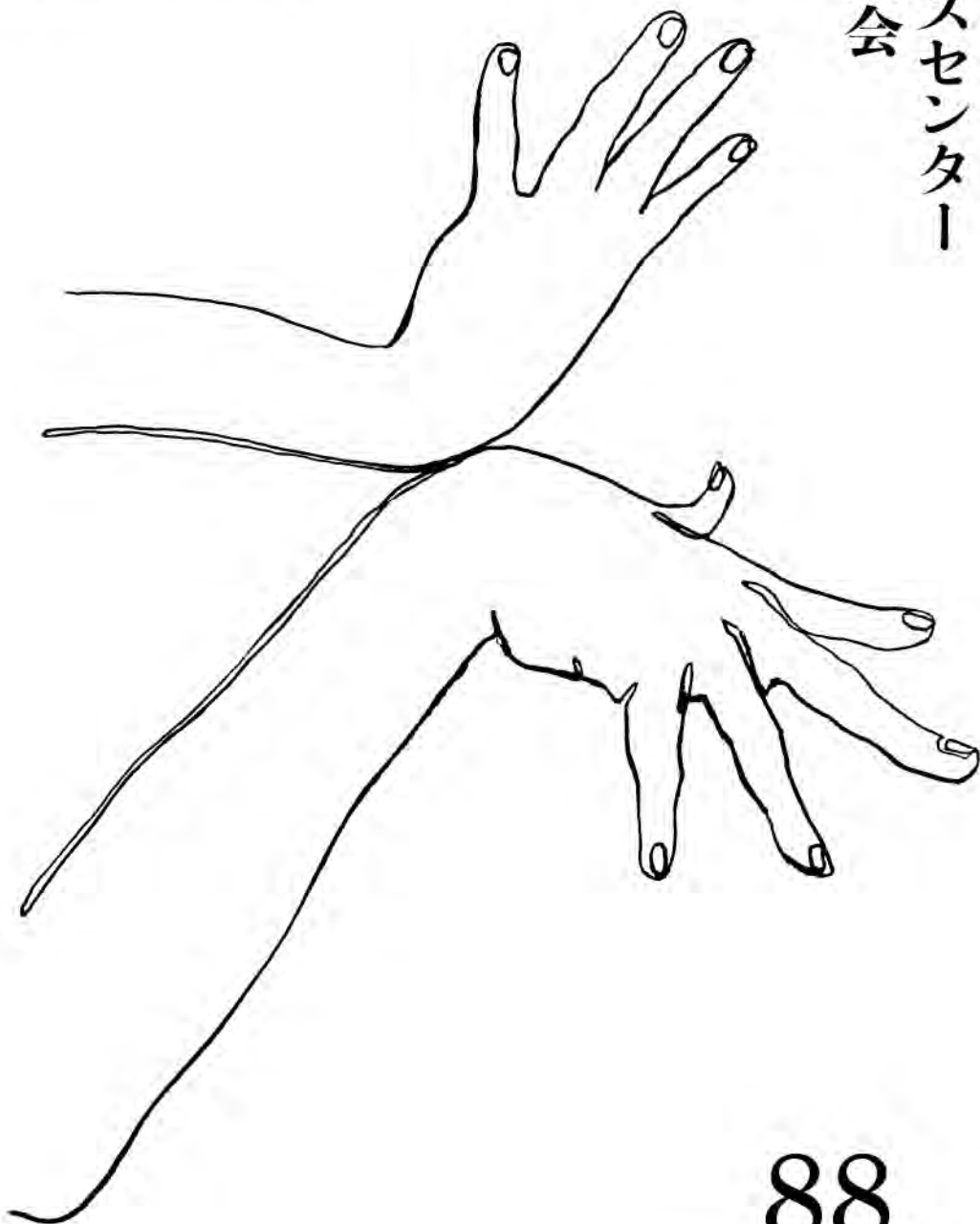


ふえき

時代を超えて変わらないもの

特集

ユースセンター
座談会



88



子どもたちが社会とつながって、自分たちで場づくりを
していけるように

Pocket 福岡 要

森分… まず自己紹介をお願いします。
福岡… 一般社団法人 Nest という団体で、「村全体を学びのフィールドにする」という活動をしています。昨年3月に拠点として「学習フイロソフイーセンター Pocket」をオープンしました。子どもたちに選択肢を提供しなくて、いろんな機能を詰め込んでいます。例えば動物園や博物館、映画館、美術館、アトリエコーナーのほか、本屋と文房具屋も併設しています。

西粟倉村には、高校・大学がありません。だからどうしても、15歳の春には村外に出ていきます。それまでに自立できる子どもになってほしい。自分たちのやりたいことを自分たちで叶えるための、企画力や計画力、人につながる力がついでれば、一学年約12人の西粟倉村から、大人数の高校に入ってもやっていけると思っています。
守谷… 備前市の NPO 法人「saloon」の守谷です。活動を始めて9年目になります。放課後児童クラブをやったり、学校や子ども

向けにプログラムを提供したり、体験活動をしたり、その中でユースセンターもやっています。ユースセンターは大きく3種類あり、10代の子どものためのフリースペース「放課後スペース NBase」と、学校の中で開催している「校内しゃべり場」、それから朝の時間帯に「朝活サポーターなはち」もやっています。どれも目的は一緒で、子どもたちの放課後や休日の選択肢の一つになればいいなということと、ここに来たらいろんな選択肢につながるができるよっていうところですね。
森年… 真庭市の NPO 法人 Manabode といいます。事業としては大きく三つあり、子育て・保護者支援の「うったて」という事業、10代の居場所づくりのユースセンター事業、それから学校の先生や大学生を対象にした教育者の支援事業をしています。ユースセンターは、久世駅前オープンして、もうすぐ2年になります。今年度は中央図書館の一室を借りて、

トライアルで出張ユースセンターもしています。市とも相談しながら、これからの公的機関を使ったユースセンターをやっていくという話が進んでいるところです。
野村… 岡山市の一般社団法人 SGG です。岡山駅西口の奉還町商店街で、2017年に一カ所目の建物を借りたところから始まってどんどん広がり、今、半径30メートル以内に三つの拠点があります。
最初は高校生を対象に活動していましたが、学習塾ができて小中学生が増え、次に通信制高校サポート校ができて高校生の数が増えた。そしたら大学生がインターンやボランティアで来るようになります。現在、小学生から大学生まで週に100人くらい出入りしている状況です。ユースセンターは2022年にオープンしましたが、自分なりの「幸せ」を見つけるための時間を過ごす場になってほしいと思っています。



ユースセンターまあぶる 森年 雅子
Pocket 福岡 要
NPO 法人 だっぴ 森分 志学
幸選町ユースセンター 野村 泰介
放課後スペース NBase 守谷 克文

ユースセンター ってどんな場所？

座談会



ファシリテーター
NPO 法人 だっぴ
森分 志学

自分の価値観や将来について、中高生と大学生や社会人が少人数グループで、対話を行う「だっぴ」などを各地で行っている。

地域のつながりの希薄化や少子化が進んでいることから、子どもや若者にとって、地域コミュニティの中で自分の居場所をもって学び合い、育ち合うことが困難になってきています。
そんな中、学校でも家でもない、ユース世代の第三の居場所としてニーズが高まっているのが、ユースセンターです。
県内各地でユースセンターの運営を行っている4名の皆さんに、ユースセンターの意義や役割について、ざっくばらんに話していただきました。

奉還町商店街全体が 広い意味でのフリースクール



奉還町ユースセンター
野村 泰介

子どもにとって、 ユースセンター とは？

森分… 子どもにとってユースセンターの役割や意義って、どんなところにあると思いますか？

守谷… 子どもによってニーズが全然違うんですね。チャレンジしたい子もいるし、話し相手がほしいという子もいる。そうしたニーズをどこにどうつなげれば、その子が今いるところから半歩前に

行けるのか。そういうハブ的なところも僕らの役割だと思っています。

森年… 一人ひとりに合わせて、オーダーメイドの伴走支援をすることが私たちの仕事かなと思います。真庭市も広いので、地域ごとに文化が違うんです。なるべく私たちが向いていって、市内全域でキャラバンのに動けたらいいなと思っています。

福岡… 地方で暮らす一番のメリットは、社会が小さいこと。村長だつて、会いたいと言えば応じてくれる。だから子どもたちが社会と

分が育ててもらった原体験がある。ユースセンターが今、そうした選択肢の一つであればいいなと思っています。ただ、商店街の人はウエルカムな雰囲気なのですが、最近、子どもたちのほうが遠慮している印象がありますね。

福岡… そういえば、栗をとったことがない子が増えています。今は、人のうちの栗はとったらいけないという教育が浸透していて、子どもたちはこれをとっていいかわからない。ユースセンターで、「この栗はとっても大丈夫だよ」というのを、再度パブリックにしなきゃいけないと思います。

Pocket 【西栗倉村】

福岡 要

一般社団法人 Nest が、日本財団の「子ども第三の居場所事業」の助成を受け、西栗倉村との協働により設立。わくわくが詰め込める、ほけーっとできるという意味が込められている。



野村… 参画することによる楽しさ、ワクワク感をどれだけ出せるのかっていうのを、僕はちょっとだけ意識しています。

つながって、自分たちで場づくりをしていけるよう、15歳までに村内のいろんな人と顔見知りになって、成人式で帰ってきたらいろんな人から祝ってもらえるというような社会形成が、少しずつできるいいなと思っています。

野村… 僕のところは都市型です。都市はメリットが多



ユースセンターまあぶる 【真庭市】

森年 雅子

10代のための秘密基地。「自分たちで創る自分たちの居場所」がコンセプト。駄菓子屋、子ども食堂、小学生への学習支援を中高生が行うことも。NPO法人 manabo-de が運営。

ように見えるけど、生活の世界と社会が離れているという課題があります。僕はここの距離を縮めるのが、都市型ユースセンターの役割だと思っています。商店街だと、人間関係さえ構築すれば、そこがやりやすい。僕は奉還町の商店街全体を、広い意味でのフリースクールだと思っています。

僕自身、奉還町で小中高と過ごしてきました。古本屋、駄菓子屋、ゲームセンターなど、学校以外の場所でも自

地域にとって、 ユースセンター とは？

森分… では、地域社会にとって、ユースセンターの役割や意義はどういうところでしょうか？

福岡… 子どもたちが社会参画していく場であるということかな。それで「税金が一億円上がります」みたいなことではないのですが(笑)、今の活動がきつと、100年後ぐらいに根っこが伸びて花開くんじゃないか。

野村… 若者たちが自分たちの社

会を、自分たちの良いようにつくり変えるための練習の場が、ユースセンターだと思います。極端な言い方をすると、革命なんですよね。我々が古い世代は、革命が起きた時にいかにか捨てられないようにするか(笑)。世代間の分断を極力防ぎながら、次世代にバトンを渡していくというのが大事な役割じゃないかなと思います。



その子が今いるところから 半歩前に行けるハブ的なところ も僕らの役割



放課後スペース INBase
守谷 克文

ユースワーカー的な視点を
持った人たちが、地域の中にも
増えてほしい



ユースセンターまあぶる
森年 雅子

守谷… 僕も地域を見ていて思うのですが、80代くらいの高齢者と子どもたちって、断絶があるんですよ。接点がないから、表面的に

しか見られない。髪の毛を染めてるとか、ピアスをあけてるとか、そういうところにしか目がいかなくなるんです。でも、ユースセンターが間に入って一緒に何かしたり話したりすることで、一人の人間として見られるようになる。別にめちゃくちゃ仲良くなるとか、盛り上がるというわけではないのですが、シンプルに接触回数が増えることで、お互い顔見知りだという空気ができる。それがあるとなると、地域が全然違うんで



ユースセンター のこれからを 考える

森分… 最後に一言ずつお願いします。

守谷… ユースセンターって、一般にはまだなかなか認知されていない。その点、子ども食堂という名前は理解しやすいですね。もしかしたら世の中の認識と実態とはちょっと違うのかもしれませんが、そ



放課後スペース INBase 【備前市】

守谷 克文

中高生のためのフリースペースだけでなく、居場所がなくなりがちな10代の小学生(4年生以上)限定の放課後児童クラブも併設し、幅広い10代が集う。NPO法人 f.saloon が運営。

すよね。

森年… うち

は昨年度出産したのですが、真庭市内に同級生が169人しかいないんです。空き家も増えています。「空き家ストリート」と言われてもおかしくない場所にユースセンターを開所しました。真っ暗だった通りに、夜8〜9時まで明かりがついて、中高生の声がワイワイ聞こえるだけで地域は元気になるんですよというお声をいただき、やって良かったと思いました。

森分… ユースセンターって、教育的な部分と、教育では括れない部分があるような気がします。

野村… 僕が大切にしているのは「みんな一緒に違うことをする」ということです。多様性を認めながら、そのコミュニティを健全に、誰一人取り残さないよう前に進めていくためには、それが保証されないとダメだと思います。

森年… うちのユースワーカーさ



奉還町ユースセンター 【岡山市】

野村 泰介

奉還町商店街の「地域交流ステーション verde」内にある、中高生のための居場所。人気ラーメン店「麺酒一照庵」による「学食」も話題に。一般社団法人 SGSG が運営している。

んたちに、できるだけダブルワークしてほしいとお願いしています。できるだけ仕事や生活、価値観の異なるスタッフを揃え、そのスタッフと子どもたちとの対話を通して、一人ひとりのニーズを見つけてるようにしています。

れでも、みんなが「そうだよね、必要だよな」って納得できて伝わりやすい言葉を探していくという作業が、ユースセンターにも必要だと思います。

森分… よく「第三の居場所」という言葉を使うけど、それはどうですか？

守谷… こういう場ではもちろん共有できるのですが、地域の人に「第三の居場所」と言っていて、通じるかな。説明として理解できても、「第三の居場所がなぜ必要なの？」という、バツと伝わる言葉がない。

野村… ユースセンターって、ある

だけで尊いと思っています。助成や行政の指標って「数」なんですよね。何人来たか、絶対聞かれます。でも、我々にとっては「n+1」なんです。一人ひとりに対して何ができたか。だから決してコストはよくないけれど、あるだけで誰かの安心になる、それがユースセンターだと思っています。

森年… ユースワーカー的な視点を持った人たちが、地域の中にも増えてほしいですね。ユースセンターがなくても子どもたちが自分らしく生きていけるなら、地域で支えられる。ユースセンター

が増えるのもうれしいですが、そういう人的リソースが地域の中で、もっと発展していったらいいなと思います。

福岡… 僕は「第三の居場所」っていうのは、家庭、学校に次いで三番目ということではなくて、家庭と学校の間、真ん中、社会との接続部分にいてという位置づけのことなんじゃないかと思っています。今日は、皆さんの素敵な実践についてお話を伺い、勇気をもらいました。

ユースセンターって、 教育的な部分と 教育では括れない部分がある



NPO 法人 だっぴ
森分 志学

P o c k e t

学びのプロデューサーの Nest が作る安心かつ挑戦的な居場所では、ふらっと寄れる日常の中で様々な体験ができ、自分のやってみたいを核に学ぶ「学習センター」の機能を持っている。①自然遊びの出撃基地②文化交流のおもちゃ箱③やってみよう!の工房を3つの柱に多世代がまじりあう「コミュニティモデル」の居場所を作っていく。

運営団体：一般社団法人 Nest 代表 福岡 要

所在地：西粟倉村長尾 1435-2

利用時間：毎週 火・木・土 14時～18時

月1 水・金 14時～18時

地域食堂 火・木 18時半～19時半

利用条件：小学校4年生以上～高校生

費用：1000円/月・曜日、1回利用500円 所得に応じて応相談 兄弟割あり



奉 還 町 ユ ー ス セ ン タ ー

奉還町ユースセンターはユース世代(中高生世代)が自らの意志で居場所を選び自発的に活動できる場として、2022年12月、民設民営のユースセンターとして開設。センターでは友達とわいわいお喋りしたり、一人で静かに本を読んだり、楽器を弾いたり、若者支援の専門家と進路相談することもできる。助けを借りて、道を選び、仲間に出会って、新しい発見。自分ではじめての挑戦の先には、レベルアップが期待できる。

運営団体：一般社団法人 SGSG 理事長 野村 泰介

所在地：岡山市北区奉還町 3-1-32 地域交流ステーション verde(ベルデ)内

利用時間：毎週火曜日～金曜日16:00～19:00

土曜日13:00～17:00 日曜日 定休日

利用条件：メンバー登録をした中高生 費用：無料



団

体

紹

介

N P O 法 人

だ っ ぴ

「若者の可能性と実現力を開拓する」をミッションに、中高生・大学生のキャリア教育等に取り組むNPO。主に岡山県を活動拠点として、中高生が大人と対話する「中学生・高校生だっぴ」や中学校・高校の探究学習のカリキュラムマネジメントなどで学校教育のサポートを行っている。また、高校生の起業支援ややってみよう!の実現に伴走したり、進路探究メディア「生き方百科」で岡山の大人や企業の働き方などを中高生に届けている。

代表理事 森分 志学

所在地：岡山市北区表町1-4-64

上之町ビル3階301



ユ ー ス セ ン タ ー

ま あ ぶ る

真庭市を拠点とし、10代が自分たちで創っていく秘密基地。“やってみよう”、“知りたい”、“話したい”、“遊びたい”が詰まった空間で、新しい自分を発見したり、第3の居場所での交友関係を築いたり、出会ったことのない自分を見つけられる場所。ユースセンターまあぶるでは、10代の意欲や創造性に働きかけをするスタッフ(ユースワーカー)が、悩みを聞いてくれたり、一緒に遊んでくれたり。県内外の中高大学生との交流も活発。

運営団体：NPO 法人 manabo-de 代表 森年 雅子

所在地：真庭市久世 2477 利用時間：放課後、休日

利用条件：メンバー登録をした10代の若者 費用：無料



放 課 後 ス ペ ー ス

I N B a s e

放課後スペースINBaseは、備前市の10代の機会と選択肢を広げることを目的に、2021年10月に伊部駅でスタートし、2025年4月に現在の場所に移転。センターを起点として、地域や大人との出会いを生み出す場としても進化を続けている。現在は放課後だけでなく、学校内や朝の時間帯にもユースセンターを開所し、10代が自分に合った形でアクセスできるように複数のチャンネルを展開している。

運営団体：NPO 法人 f.saloon 代表執行役 守谷 克文

所在地：備前市伊部 1405-9 2F

利用時間：朝・放課後など 利用条件：なし 費用：無料



今年開催中の瀬戸内国際芸術祭 2025（以下、瀬戸芸）は、瀬戸内の島々を舞台に、3年に1度開催される現代アートの祭典です。その開催を陰で支え、その成功に不可欠な存在となっているのが、「こえび隊」。一体、どのような人々が、どのような役割を担い、そして何が彼らを瀬戸内の島々へと駆り立てるのでしょうか？ 実際にこえび隊の活動を体験し、こえび隊の知られざる姿や魅力をお伝えします。

「こえび隊」を体験して知る瀬戸芸の魅力

この文章を書いている今は、6回目を迎える瀬戸芸の春会期が終了して、夏会期が開幕して1週間後。大勢の方が世界・日本全国から訪れており、「ふえき」読者の方の中にも、「行ったくよ〜！」という方も多いかと思えます。ただ意外にも、岡山県民は「近いからいつでも行ける」とか「期間中は混むからなあ」と、瀬戸芸に参加したことのない方が少なくないのも事実であったりします。

今回は、「アート作品」や「船での島旅」とは違った切り口で、瀬戸芸の魅力を紹介いたします。



「こえび隊」。聞いたことがある方も多いかと思います。一言でいうと、「瀬戸芸を支えるボランティアサポーター」。瀬戸芸は第1回の2010年から3年に一度開催され会期は約100日間。その期間の運営サポート（主に作品鑑賞の受け付け・案内）はもちろん、開催前のアーティストの作品制作のお手伝いや、作品展示会場となる古民家などの清掃等、準備段階から支えています。

「こえび隊」って知ってますか？

特筆すべ

きは、日本中・世界中から集まって、活動していること。前回の2022年はコロナ禍の影響もあり海外からの参加は大幅に減少しましたが、コロナ前の2019年では延べ7165人（実数1324人、1324人中海外からの参加者は約18%200人以上でした）。

参加に年齢制限はなく、1日からでも参加でき、アートが好き、島が好き、芸術祭を手伝いたいという人なら誰もが加えられるのです。

さらにさらに、3年に一度の会期約100日間以外にも会期外の約1000日、島のお祭りや運動会、文化祭などの行事にも積極的に参加して、島の人たちと交流を深めます。きたるべき瀬戸芸期間を島の人と一緒に準備して、島を訪れるゲストを迎える機運を醸成するといった、絆を深める地道な活動も行っています。それこそが、こえび隊なくして瀬戸芸は成立しないといわれないのであります。



あります。

会期前の作品制作サポート、会期中の作品鑑賞受け付け、案内、会期外の島の人たちとの交流等、参加する人がそれぞれの期待や目的をもって参加しています。こえび隊ぞつこの小生、少力が入りすぎました。汗。こえび隊についての詳細、参加方法等は、こえび隊Websiteをご覧ください。

瀬戸芸ワークショップに「こえび隊」として参加してきましたよ！

過去の瀬戸芸でも何度もこえび隊として、作品受け付け・案内やイベントスタッフとして参加したことがあります。今回は、瀬戸芸ワークショップ（WS）スタッフとして参加してきました。7月某日、新しく瀬戸芸会場に加わった香川県側の志度・津田エリアの志度寺で作品を披露されるフィリピンのアーティスト、リーロイ・ニュー氏の作品の一部を制作するというWSです。

当日は、こえび隊事務局のスタッフ2名に加え、こえび隊参加者は8名（WSスタッフ5名、作品制作サポートスタッフ3名）で高松に集合。事務局のワゴン車、軽トラに相乗り、朝から酷暑の中志度寺に向かいました。一緒に参加したこえび隊さんは、瀬戸芸開始の2010年から参加されている香川地元のベテランさんや、今回初めて関西から参加したという女性、そして以前参加したときにご一緒したことがあるお久しぶりさん等、老若男女が揃いました。車中ずつと、これまで参加したこえび隊の活動やこの日のWS・作品制作サポー



トへの期待等への話が弾み、あつという間に現地へ。参加者同士の交流も、こえび隊参加の醍醐味の一つです。

地元から多くの参加者

現地で、すでに数日前から作品制作にとりかかっているリーロイ氏とそのスタッフと合流。リーロイ氏はとてもユニークで気さくな方で、多少緊張気味だった私も一気に和みました。

会場の志度寺は、飛鳥時代創建といわれる由緒あるお寺。境内の一見、龍安寺石庭のミニチュア版とおもわせるような枯山水「無染庭」は見ごたえがありました。その外側にある「曲水庭園」に、制作中の作品「メブヤンのバランガイ（メブヤンの船または聖域）」が設置されていました。

到着後、スタッフによる朝礼。WSスタッフ班と制作サポート班に分かれ、当日の役割やスケジュールなどの説明を受けました。WSの内容は、リーロイ氏の作品の一部を、使用後のペットボトルを加工して制作するもの（〜1）で、制作工程のレクチャーとカッターナイフなどの使用方法の留意点等の確認を経て、参加者の来場を待ちました。

WSは、午前10時から午後4時まで。参加者は三々五々参加するスタイルで、親子連れ、おひとり、おじいちゃんおばあちゃん含め3世代8人ほど

で参加してくださる方など約30人の方が参加されました。会場の地元志度・津田エリアからの参加者が多く、制作をしながらお話しする中で、今回の瀬戸芸から新しく会場に加わった地元の方々の瀬戸芸に対しての喜び、期待をとても感じました。地元の方々が瀬戸芸をどのように受け止めているのか、直にお伺いする機会はこれまでもあまりなかったため、大変新鮮で興味深く、あれこれ根ほり葉ほりお聞きすることで、参加者の方々のコミュニケーションが深まりました。

作品づくりに没頭する参加者

参加者の方には、WSの途中に今ペットボトルで作っているこのパーツが、石庭の向こう側にある竹で編んだ大きな作品に取り付けられて完成することを伝えるのですが、皆さんそれを聞いて発奮したのが、



その後の制作には一段と熱が入り、集中していたのが印象的でした。参加者の方への説明、サポートにも頑張りましたが、私含め、こえび隊WSスタッフは、参加者と一緒にパーツづくりに没頭しました。あっという間に終了時刻の午後4時。後片付けをして、リーロイ氏、スタッフを交え、本日のこえび隊参加者で記念撮影。その間もリーロイ氏は我々スタッフを大いに笑わせてくれ、和やかなひと時のち終了、帰途につきました。朝7時に岡山駅を出て、6時過ぎにたどり着いたハードな一日でしたが、心地よい疲労感と瀬戸芸に参加してきたぞという満足感で、何とも言えない充実感を味わえました。

*1 使用済みペットボトルを3つのパーツに分けて加工。蛍光色のパーツは、リーロイ氏がフィリピンから持参した蛍光色のペットボトルを加工したもの。



メブヤンのバランガイ(メブヤンの船または聖域)フィリピンの神話や植民地時代前の船、志度に伝わる海女の伝説を組み合わせ、航海民族であるフィリピンの伝統、環境問題、そこから未来をどのように切り開いていくかという思考を込めた作品。

今回は会期前のWSスタッフとしての参加でしたが、会期中のこえび隊の主な役割は、作品受け付け・ご案内になります。たくさんの方のゲストの方とお会いでき、受け付けながら、「どこから来たんですか?」「この後はどこに行く予定ですか?」「どんな作品を鑑賞されましたか?」等々、海外の方含め多くのゲストの方とコミュニケーションが図れること、そして受付担当をした作品に愛着が湧いてくることも、こえび隊として瀬戸芸に参加する楽しさ、喜びにつながることに違いありません。

皆さんがゲストとして訪れる際、作品の受け付けの方の大半(一部美術館会場などのスタッフ除く)は、こえび隊メンバーです。ぜひ、積極的に声をかけていただき、コミュニケーションを深めていただければと思います。ゲストの方々と交流することを求めてこえび隊に参加された方々ですので、きつと、笑顔で返してくれると思います。

秋会期は10月3日から。ぜひ現代アートと瀬戸内を満喫しに、会場を訪れてください。そしてこえび隊に会いに……大島と宇野港エリアの2会場です。

瀬戸内国際芸術祭2025

Setouchi Triennale 2025

秋会期

10月3日(金) — 11月9日(日) 38日間



◆秋会期開催エリア
直島 豊島 女木島 男木島 小豆島 大島 犬島
高松港エリア 宇野港エリア 本島 高見島
粟島 伊吹島 宇多津エリア

各エリアの休日
・直島:原則毎週月曜日
・豊島-犬島:原則毎週火曜日
・女木島-男木島-小豆島:10/22(水)、10/29日(水)
・大島:10/4(土)、10/22(水)、10/29(水)
・本島-高見島-粟島-伊吹島:10/23(木)、10/30(木)
※祝日の例外がありますので、詳しくは瀬戸芸Webサイトでご確認ください

SNSの時代に、なぜZINE?

表現者をつなぎ、文化の生態系を生み出す ローカル・コミュニケーション・メディア

大型書店には流通せず小規模に自主制作され、内容や刊型の自由度が高く多様でユニークなものが多い冊子「ZINE(ジン)」の世界をご存じだろうか。近年、岡山や香川など瀬戸内でもその作り手が増え、独自の仕入れを行う個性派書店での取り扱い等が広がり、ZINEに特化した販売イベント「おかやまZINEスタジアム」も開催されるようになるなど、そのシーンが広がつつある。

一般的に定義は「個人または少数の有志が非営利で発行する、自主的な出版物」。語源はMagazine(18世紀)やFanzone(1920-30年代)などといわれており、日本では1980年代からコピー機と共に普及。「コピー本」「同人誌」「ミニコミ」などと呼ばれてきたが、後者の2つはオタク文化やマスコミ批判から生まれたもので、内容に偏った印象がある方も多かったろう。

20年以上前から、その普及活動に携わる野中モモは「自主的に、気軽に、小さな規模で」出版することがジンを「ジンの条件」と語る。「不易」のように地域の企業・団体や行政が発行する情報誌や文化団体の活動報告冊子(自主的・小規模とは限らない)、アーティストが手がけるこだわりのアートブック(気軽ではない)等にもZINE的なものがあるが、無名の個人でも気軽に数冊から制作している人が多いのがZINEカルチャーの本流だと私も感じている。それはある意味でSNS的に、ささやかな気持ちや、切実な声や、あふれる表現を身近な、あるいは遠くの誰かに届けてくれるメディアだと言える。インターネットにはつながっていないけども。



2025年3月に初開催された「おかやまZINEスタジアム」の様子

ZINEに会える場所



岡山県岡山市 @nagaihiru

岡山大学病院近くにある、古本を中心に新刊図書、ZINEなどを扱い、音楽イベントなども行うカルチャースペース。ZINEは日記本やプライベートな内容、社会的マインリティをテーマにしたものなどがあり、ささやかでも切実な表現を扱っている。



451 BOOKS

岡山県玉野市 @451books

玉野市の児島湖沿いの住宅街にある書店。店主自らが設計した2階建ての店内には、新刊図書・古書・洋書・ZINE・リトルプレスなどがぎっしり並んでいる。絵本やZINEが充実。絵本の講座やイベント出店なども行っている。



宇野港編集室

岡山県玉野市 @uno_editors

橋本が運営するシェアスペース。リソグラフ(簡易転写機)、大判ポスター印刷機、紙折り機、裁断機などがあり、ZINEの制作活動が行えるほか、宿泊サービスも。メンバーが制作したZINEの物販も行っており、県内外で出店による活動もしている。

ZINEに会えるイベント

おかやまZINEスタジアム(岡山)

岡山市等による「おかやま文学フェスティバル」の一環として開始。ZINEを中心にリトルプレス・フリーペーパーなども出品されている即売イベント。前回は101ブースが出店。3回目となる今回は2026年3月7日、会場:岡山ドームで開催。



文学フリマ(東京、香川、広島など)

「文学」とついでに「自ら(文学)と信じるもの」を対象としているので幅が広く、ZINEも多く出品されている。東京では2002年に初開催され、これまでに40回を数える。現在は九州から北海道まで全国8箇所で開催。



ZINE講座:入門編(宇野港編集室)

宇野港編集室では、毎月ZINE講座や製本体験ワークショップ、リソグラフの使用法を学ぶ合う研究会などのイベントを開催。2025年内のZINE講座は10月30日(木)、11月22日(土)、12月20日(土)の予定。



こんなZINEがあります

サカイシユラン

さかいたべた まにわのおいしいもの

岡山県真庭市の地域おこし協力隊として活動していた酒井悠さんが、市内で実際に食べ歩いたグルメ情報をまとめた1冊「ミシユランガイド」を意識させられるタイトル。自ら撮影した写真、やんちゃなふたりの「ハンバーガー」器にもこだわった「カレーセット」など本人ならではのコピーが効いている。橋本が講師を担当したZINE講座市民の情報発信力向上セミナー」をきっかけに試作後、改訂したものだろう。

サカイシユラン



月に2回、朝7:30に 宇野港へ集まる21の景色

宇野港ラジオ体操ZINE2025

2021年11月から2回、岡山県玉野市で行われていた宇野港ラジオ体操に集う有志が制作したZINE。お気に入り朝ごはんスポットから、地元かん農家の真話、町に残る近代建築への思い、玉野市の食生活や移住2拠点生活についてなど。21冊が2ページずつ担当、それぞれのテーマや手法で自由に表現されていて、21のZINEを1つにまとめた1冊とも言える宇野港編集室のメンバーも5名参加している。



まちを読む

ZINE vol.1 民家の屋根を読む

アーティストで古民家改修等も手がける山本晶大さんが制作した、民家の外観から読み解ける建物やまちの情報をまとめたZINE。第一弾は屋根にフォーカスして、例えば原初的な「草屋根」、明治以降に普及していった「トタン屋根」、瓦葺きも「本瓦」「棧瓦」「セメント瓦」などの種類により主流だった時代が違ってくるなどの情報が分かることなどがまとめられている。第二弾は基礎について。



よりみち芸術祭 vol.1 in 瀬戸内

芸術祭・アートプロジェクトの現場を愉しむ

橋本がはじめて制作したZINE。「豊島で迷なパンパに会う」「仏生山で紅茶会にお邪魔する」など、瀬戸内めぐりてきたエピソードを盛り込んだノンフィクション風のエッセイ集。地域の傍にある風景や人の営み、文化に出会うことができるかもしれない「よりみち」の推奨がテーマ。東京のスタジオ「Hand Saw」の2階にあるリソグラフでA3用紙に印刷し、8ページの折本として仕上げている。



一般的な本が売れなくなってきたり、ZINEのシーンが広がりをみせているにもかかわらず、ZINEの背景があると考えられる。

1 アナログ回帰: ZINEのように個人や有志でも、非営利・自主的な表現がしやすいインターネットやSNSだが、普及のしやすさにより情報は埋もれがちで、フィルターバブルによる偏りが起きている。スマートフォンが普及して以降は、さらにこの状況が加速。近年では意識的に「SNS断ち」をする人もい出してくるZINEというスタイルをあえて選択する作り手、読み手が増えつつある。

2 制作の敷居が下がった: ZINEには絵や写真が用いられることも多いが、ほぼ誰でも日常的に表現に使用している文章を紙に印刷し、折るだけでも形になり、表現の敷居が低い。印刷についても、コンビニのコピー、家庭用のプリンターなどが普及して身近な環境で可能になったし、パソコンが得意な人であれば、ソフトやオンラインサービスで簡単なデザインもできる。インターネット投稿による印刷サービスも驚くほど安くなった。制作や販売のコツも、ネット検索等で調べられる。

3 イベントや拠点がなくなった: 作り手と共に、ZINEを扱うイベントの数も増えている。イベントでは作り手が自ら販売していることも多く、来場者は直接コミュニケーションすることもできる。そうではなくとも書店で本を選んだら勧められたりするのが異なる「いま、ここ」だけの体験ができるのが魅力だ。出店する側も反応を見るのが楽しいし、作り手同士で交換したりすることもできる。書店や飲食・雑貨店でもZINEを目にするが増えつつある。作り手が集うスタジオ等も出てきている。

4 シーンの重なりによる相乗効果: 本の出版や流通のあり方が変化し、ZINEほどではなくても小規模に事業を行う出版社や書店が出てきて、本好きの間では「リトルプレス」「独立系書店」といった言葉が浸透してきた。「アートブック」に特化したフェアも人気がある。また、特定の地域の情報を扱うフェアなども「ローカルメディア」として注目される動きもある。それぞれの言葉が持つ意味やカバーする範囲は異なりつつも重なる部分があり、相互に関心のある人を引き寄せている。

このように、この10年ほどでZINEの再発見的な動きや、これまでそれを知らなかった、意識しなかった方への露出が増え、作り手や読み手が増えているというのが現状だ。

ZINEカルチャーの面白いところは、誰もが表現者になりうる多様性があること。そして、ものを介して出会う新たな表現が生まれ、文化の生態系が醸成されている点だ。作り手は自ら手を動かすだけでなく、読み手に届けるところまで携わる余地が大きいので、そのプロセス自体を楽しむ人が多い。読み手もそれを直に見聞きできる可能性が高く、ものがその熱量と共に伝播したりもする。そうすると、刺激を受けた読み手が作り手にもなることも多い。ものを交換する、双方向的なコミュニケーションも起こりやすい。

それらが、インターネットのように自動化されにくい偶発性やリアルな手触りを大事にしたカルチャーの中で、ZINEを生み出している。言わば、「表現者をつなぎ、文化の生態系を生み出すローカル・コミュニケーション・メディア」になってきていると言えるだろう。

企画・構成

橋本 誠 (宇野港編集室)

岡山探山高校、横浜国立大学卒業。東京文化発信プロジェクト室、一般社団法人ノマドプロダクション、秋田市文化創造館等を経て、合同会社生活と表現を設立。岡山県内外の文化芸術事業に企画・編集、中間支援等を通して携わる。2024年1月、岡山県玉野市にコワーキング「ZINEスタジオ」[宇野港編集室]を開設。編著に「危機の時代を生き延びるアートプロジェクト」。

僕が、活動をはじめた理由

「法」というと、堅苦しい、自分には縁がない、怖い、そんなイメージをお持ちではないでしょうか。法律家として、日々の業務や法的なものの見方・考え方を伝える法教育に取り組む中で、法やルールをもっと楽しく身近に、日常を豊かにする一文化として、あるいはアートのような存在として伝えたい、そんな想いでこの活動をはじめました。

大学時代に他者との違いに価値を見出す自由で懐の深い憲法学に惹かれ、自然と自由で懐の深いアートにも関心を持つようになりました。そこで、弁護士として働きはじめた約10年前に岡山県の主催する「まちアートマネジメント講座」に参加。これをきっかけとして、矢掛町で「やかげ芸術街道」という芸術祭の企画・運営や、創作活動に関わる方の法律相談等に携わるようになりました。

また、それだけでは飽き足らず、自身でも、活動を通じて知り合ったアーティストやデザイナーと、場のルールやその届け方をデザインするワークショップや、道路や公共施設等の日常的な風景から見えるルールを参加者との対話を通じて鑑賞する実験的な取り組みを行っています。

これらは分野横断的な活動として、学生のみならず、ビジネスに取り組みむ社会人にとっても、もの見方や課題解決の引き出しを増やす良い機会になると感じています。実際、当研究会には、アーティストやデザイナーのほか、教員や研究者、事業家等も含まれており、参加されている方の層が広いのが特徴です。まだまだ実験的な取り組みの最中ですが、活動に少しでも興味をお持ちいただけましたら、まずはイベントにご参加いただけますと幸いです。

「法やルールは日常を豊かにする文化・芸術？」

文・山下宗一郎
法とアート・デザインに関する研究会

法とアート・デザインに関する研究会

教育文化の領域において、法、デザイン、アートの分野横断的な取り組みが不足しているため、各分野の学生をターゲットに分野横断的な学びや交流の機会を設ける。年2回、対話型鑑賞とデザイナーやアーティストをゲストに招いたトーク企画を実施し、法、デザイン、アートを軸としたもの見方・考え方を体系化し、分野横断的な学びの1つのモデルを構築する。



法学部と芸術学部の学生とカフェのルールをデザインするワークショップの様子



道路や公共施設等に潜むルールを対話を通じて鑑賞する



私が「真庭学習会」に入ろうと思った理由は、将来教職に就きたいと考えているからです。

学校で「真庭学習会」の存在を知り、実際に小学生と関わってみたいと思いました。高校では寮に入り、その生活との両立が難しいのではないかと不安がありました。それでも参加したいという思いがあったので、学校の先生に相談を重ね、後押しをしてもらい、参加することにしました。

実際に小学生と接してみると、最初は戸惑うこともたくさんありました。アドバイスをし合いながら、少し横にしゃがんで教えてみたり、目線を合わせ

ることを意識したりしました。そうすると、壁を感じにくくなり以前よりも話せるようになりました。他のボランティアは1日、2日で終わってしまふものが多いのに対して、「真庭学習会」では年間を通して小学生と関わることが

できます。そのため、小学生一人ひとりと向き合うことができ、成長を間近で見届けることができます。私はそれが最大の魅力だと感じています。

活動を進めていく中で集中がきれてしまったり、休憩と勉強のメリハリがつけられなかったりする子への対応の難しさを知りました。メンバーで話し合いを重ねたり、「後〇分一緒に頑張ろう！」や「今日はここまで頑張ろう！」などの明るい声かけをしたりするように心がけました。そうすると集中して取り組む子が増えて嬉しかったです。

「真庭学習会」は今年で7年目になります。小学生が自分から学びたいと思える環境づくりや小学生と高校生と一緒に成長していく学習会にしていきたいです！

「小学生と一緒に成長する学習会に」

文・桐原瑠衣 真庭学習会

真庭学習会

「真庭学習塾」として始まり、子どもたちの学習支援を目的に設立。単に学習支援を行うのではなく、年齢が近い高校生が質問をしやすい雰囲気をつくることで、小学生が前向きに勉強に取り組めるような学習会を週2回実施。年間50回、延べ500人参加してもらおうことを目指す。



学習会の様子



夏まつりの様子



私が、活動をはじめた理由

梅干しのこと

文 斉藤牧枝

玉野の食は豊かです。みやま公園に行けば、新鮮な旬の野菜や魚がいつでも手に入るし、島に出かければ、収穫物を分けていただく幸運がしばしば訪れます。さらに昨年からは、玉野の仲間たちと「畑の会」を結成し、自分たちで育てた野菜を慈しみながら味わうようにもなりました。

瀬戸内国際芸術祭春会期が終わり、ほっと一息ついた6月のある日、豊島で「梅干し用」と、たくさんの小梅をいただきました。

梅干し作りは初体験。果たしてカビを生やすことなく完成にたどり着けるのでしょうか？

ちょうど畑の会のみんなも梅仕事を始めた頃でした。仲間の様子をうかがいつつ、まずは、小梅を黄味がかるまで2〜3日追熟。ヘタを取り除き、水洗い。ザルにあげて水を切り、しばらく乾かす。最後に少量の焼酎を入れたボウルの中で転がしたら準備完了。保存容器に塩と梅を交互に詰めるだけ。塩は梅の重量の15%と決め、重石もしないことにしました。

最初はとにかくカビに怯えていましたが、毎日朝夕とガラス容器の中の小梅の無事を確認するうちに、だんだんと小梅がいとおいしくなっていました。10日も見守ると、カビの心配もなんだかもう必要なさそうです。

ふっくらやわらかくなった梅の実は、実際そうなのですが、まるでフルーツのよう。もしかしら、ほのかに甘いのではないかと愛でながら妄想が膨らみます。容器のふたを開け、ふくふくとした実を一粒つまんで口の中でそっと押しつぶしてみると、ああ、しょっぱい！強烈に塩が効いています！当たり前のことにも、驚いてしまいました。

それでも梅の薄皮の下にある、滑らかな果肉がほどける感じは絶品で、早くも大成功を確信。梅の実は、味見と称してどんどん胃袋に落ちていきます。

今日は7月12日。同じように梅仕事をしてきた畑の会の仲間から「土用干しが終わった」と朝いちばんの報告。そうだ、そうだった！私も天日干しだ！夏会期が始まったら毎日楽しめるよう、もっとおいしくなくては！いそいそと梅の実を広げ、眩しい日差しの下に差し出してみました。

太陽の熱で温まった梅を、またひとつつまむ極上の一日が、今まさに始まったところです。

斉藤牧枝（さいとうまきえ）
横浜市出身。2010年に始まった瀬戸内国際芸術祭のボランティアサポーター「こえび隊」として、芸術祭にかかわったことがきっかけで、2012年に本格的に玉野生活をスタート。NPO法人瀬戸内こえびネットワーク（こえび隊事務局）職員として日々活動中。



取材・文 森分 志学



“どう”生きるに、どうこだわるか。

西井 葉子
Nishii Yoko
1986年、岡山県高梁市生まれ。大学生時代にまちづくりNPOに出会い、就職。その後、2012年よりNPO法人子どもシェルターモモの事務局として、困難を抱える子ども・若者の支援に従事。2023年よりNPO法人みんなの集落研究所に入職。



西井 葉子 さん

「生きてるってなんだろうか。」
現代には「専門性を問われる」風潮があるように感じています。個人で社会を生き抜くために、あるいは専門性によって自信を担保するためだと考えます。西井さんは「自分に自信は持てない。そもそも自信を持たなくてもいい」と聞き直っているんです」と話します。それは、自分の足場を安定させるために専門性を持つべきという、ある種の強迫をうまくかわそうとする処世術のように思いました。

西井さんの大学卒業後の進路は、まちづくりNPO。友人の誘いで入ったサークル活動でできた縁からの就職でした。その後、また別のご縁でNPO法人子どもシェルターモモに転職し、11年間勤務したのち、現在の職場に移ります。みんなの集落研究所は、主に中山間地域をはじめとした県内の各地域において、高齢者の移動や空き家問題、人口減少における地域社会の維持など多岐にわたる課題に取り組んでいます。西井さんは主に事務的な業務を担当し、ワークシヨップのデータ整理やアンケート集計、チラシ作成などを行っています。

「自分が前に出るといっても、人を支える方が性に合っている」と言います。何か専門性を持つことよりも、様々なことに対応できる柔軟性を重視し、「何でもいい」という姿勢で仕事に取り組んでいます。新卒からNPO業界を渡り歩いてきた西井さんですが、「他の業界

は、主に中山間地域をはじめとした県内の各地域において、高齢者の移動や空き家問題、人口減少における地域社会の維持など多岐にわたる課題に取り組んでいます。西井さんは主に事務的な業務を担当し、ワークシヨップのデータ整理やアンケート集計、チラシ作成などを行っています。

で働いていたかもしれない」と、どこで働くかをさほど重視していません。自分とは異なる考え方の人に対しても「それはそれで面白い」と受け止めます。それは、「何でもいい」という姿勢がもたらす寛容性なのかもしれません。



NPO法人だっぴ 代表理事
森分 志学 Moriwake Shigaku

1990年、岡山県倉敷市生まれ。大学院生時代に、高校生と大人の対話プログラムを高校と連携してつくる。卒業後は、教育系の広告代理店に勤務して、高大接続の領域に関わる。2017年に岡山にUターンしてNPO法人だっぴに入職し、2020年より現職。県内20市町村50校以上の学校や自治体の学校教育・社会教育に携わる。

ダンサー・平井優子さんの新たなものが生まれる原点

「手」



「私の身体は、自分の身体なんだけど、もう一人の自分の身体を動かしている感覚です——そういう意味では『道具』なんでしょうね」

クラシックバレエからコンテンポラリーダンスまで、独自の世界観で表現を続けてきた平井さん。自身がダンサーとして舞台上立つのはもちろん、振付家として公演全体の構成・演出も行っています。

「手」は、他のダンサーよりも比較的大きいことから、自分らしい動きを追求するようになります。他では類を見ない表現の背景には、自身の身体と日々対話し、丁寧に扱ってきた積み重ねがありました。

平井さんの表現で印象的なのは、繊細かつ、時折織り交ざる不思議な動きです。本誌の表紙のモチーフを決める際も「どうしたら表現できるかな」と、様々なポーズを提案してくださいました。

直線的なラインと、関節の柔らかさが特徴の身体。なかなか筋肉が付きにくいことから、20代にはジムでアルバイトをしながら鍛えようとした時期がありました。ただ、「身体に無理な負荷をかけても仕方がない」と思い直し、自身の身体を生かす方向へ舵を切ります。独自路線を開拓する、原点のような出来事でした。

また、振付家としても「手」はなくてはならない存在です。全体のテーマやイメージを「手」で紙に書いたのち、ダンサーの動きや照明の色、舞台美術や音楽に至るまで、「手」で自らパソコンに入力し、具体的にしていく。まるで様々な楽器や音色で「交響曲」を作るかのように、多くの要素を組み合わせ一つ一つの舞台を作っていきます。「見たかったものが、次々と目の前に現れていくのが面白い。自分で踊るのは全く違う楽しさがある」と笑顔で話す姿が印象的でした。

ダンサーとしても、振付家としても、平井さんが大切にしている「手」。自分の道を創ってきた軌跡が、手の動き一つひとつに宿っているように感じました。

(絵 タケシマレイコ/取材・文 小澤 朱里)

編集後記

◆前号の表紙を飾った太田三郎さんのポンチを返しに行ったとき、「先日上京した際、長年の付き合いがある画廊に『ふえき』を届けてきたよ。私がどのようにして切手の穴を開けているかをご存じないので。興味深く読んでくれたと思います」とのこと。うれしい！「本(冊子)は旅をしていく」と聞いてはいたけれど、こうして縁を繋いでくれるのですね。◆紙といえば、手作り冊子ZINE。第1回の「おかやまZINEスタジアム」に財団としてブース出展したとき、その出展数に驚き、次から次に来る人々に驚き、なぜこんなに盛り上がっているのか不思議でした。その後大手メディアでもZINEブームを取り上げていました。◆ここでZINEの魅力を知るべく、宇野港編集室の橋本誠さんに「なぜSNSの時代にZINE？」をテーマに「原稿をお願いできないかしら」と依頼。みなさん作ってみたいくなりましたか。◆財団のZINEともいえる「ふえき」と共にandFサイトにも力を入れています。アクティビストをつなぐコミュニケーション・マガジンとして助成先のイベントの告知や活動を深掘りしたインタビュー記事やレポートなどを掲載。岡山の教育文化活動が詰まっている宝石箱だと思っています。(W)

機関誌「ふえき」
読者アンケート
ご協力ください。

▼アクセスは
こちらから



公益財団法人 福武教育文化振興財団

人づくり、地域づくりを応援します

〒700-0806 岡山県岡山市北区広瀬町1番5号 株式会社ベネッセコーポレーション広瀬町社屋
TEL 086-221-5254 FAX 086-232-3190 URL <https://www.fukutake.or.jp/>
E-MAIL eczaidan@fukutake.or.jp



福武教育文化振興財団
ウェブサイト



コミュニケーション・マガジン
and F | アンドエフ



教育文化活動助成
成果報告書アーカイブ

題名「不易」には、「時代を超えて優れたものに共通する本質的なもの」を大切にしたいという谷口澄夫初代理事長の思いが込められています。

機関誌 不易

vol.88 2025.9.25

編集・発行 公益財団法人 福武教育文化振興財団
制作 株式会社吉備人
デザイン 久延 フミカ (ヒラガナ企画合同会社)
表紙画 タケシマ レイコ
印刷 研精堂印刷株式会社